

弥生時代中四国地方における注口付きの脚台付鉢形土器

真木大空

1. はじめに

中国山地脊梁中央部の南側に位置する三次盆地は、広島県北部から中国山地を越えて日本海へ注ぐ江の川や山陰地方にも通じる西城川、盆地を貫流する馬洗川といった河川が合流する地点に形成されている。そのため、これまで瀬戸内地域と山陰地域をつなぐ交通の要衝、両文化の結節点という評価がなされてきた。

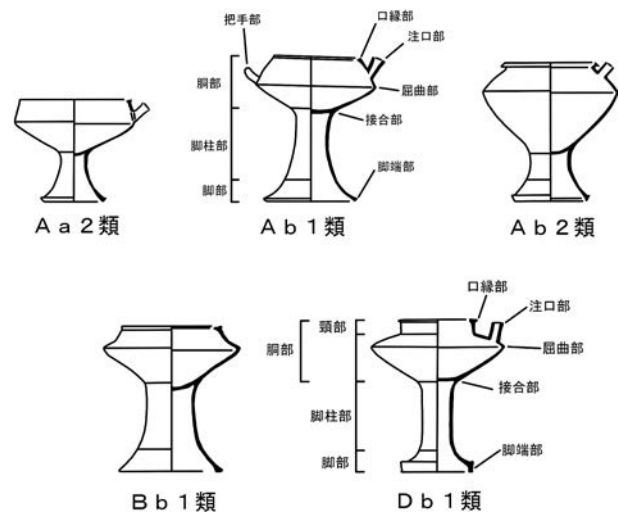
この三次盆地において弥生時代中期後葉に塩町式土器という土器群が製作される。「重層刻目文」(伊藤 2005)を指標とするこの土器群は、1960年代に研究者の目に留まり、これまで多くの論考が蓄積されてきた(潮見 1964ほか)。その多くは甕に関するもので、近年では三次盆地を越えて周辺地域にかなり広く分布することがわかってきた(石田 2013)。

また、三次盆地では塩町式土器が製作される時期、四隅突出型墳丘墓と呼ばれる特異な墳丘墓が誕生し、その後の墓制に大きく影響を与えた。この塩町式土器と四隅突出型墳丘墓は、三次盆地で共伴することも多く、互いに結び付けて検討されてきた(伊藤 2005ほか)。その中に今回取り上げる注口付きの「脚台付鉢形土器」(以下、脚付鉢)がある。この土器は、甕、壺などの日用品よりもさらに多くの文様で飾り、祭祀や埋葬に伴う特別な土器として製作され、使用された。弥生時代後期後葉に中国地方に広がる特殊器台・特殊壺が登場する以前に、このような祭器が製作されていた意義は大きい。今回は、いまだ不明瞭な部分が多い脚付鉢について、塩町式土器と弥生墳丘墓の検討を含めて理解していきたい。

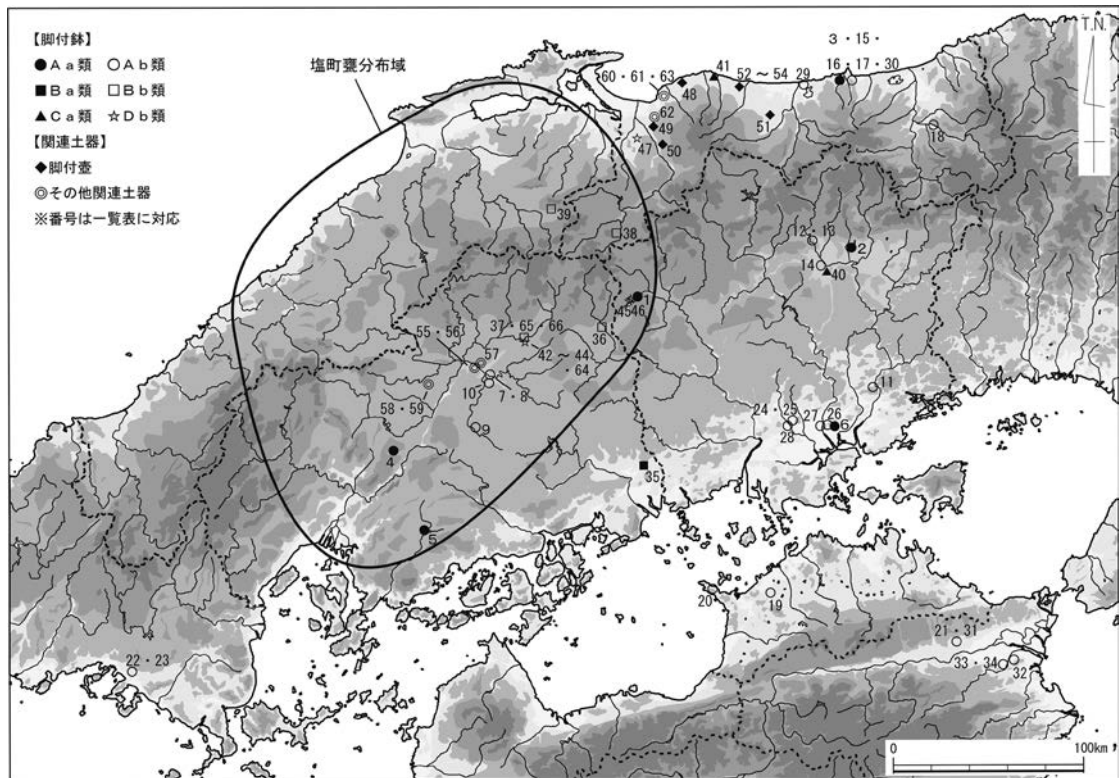
2. 資料の形態的分類 (第1図)

対象とする時期は塩町式土器がみられる時期とその前後、弥生時代中期中葉から後期前葉を対象とし、地域としては中四国地方全域で集成を行った。対象土器は注口をもつ、もしくは補強粘土などによって注口の存在が確実なものを原則とし、注口が確認できないものは、器形や出土状況などから筆者の判断によって集成している。

集成の結果、35遺跡から47個体を確認した⁽¹⁾。地域別の内訳は広島県12例、岡山県15例、鳥取県10例、島根県1例、山口県2例、香川県2例、徳島県5例となる(第2図)。分類は胴部と脚部それぞれの分類を組み合わせる。



第1図 類型模式図と各部名称



第2図 脚付鉢関連土器分布図 (S=1/4,000,000)

(1) A類

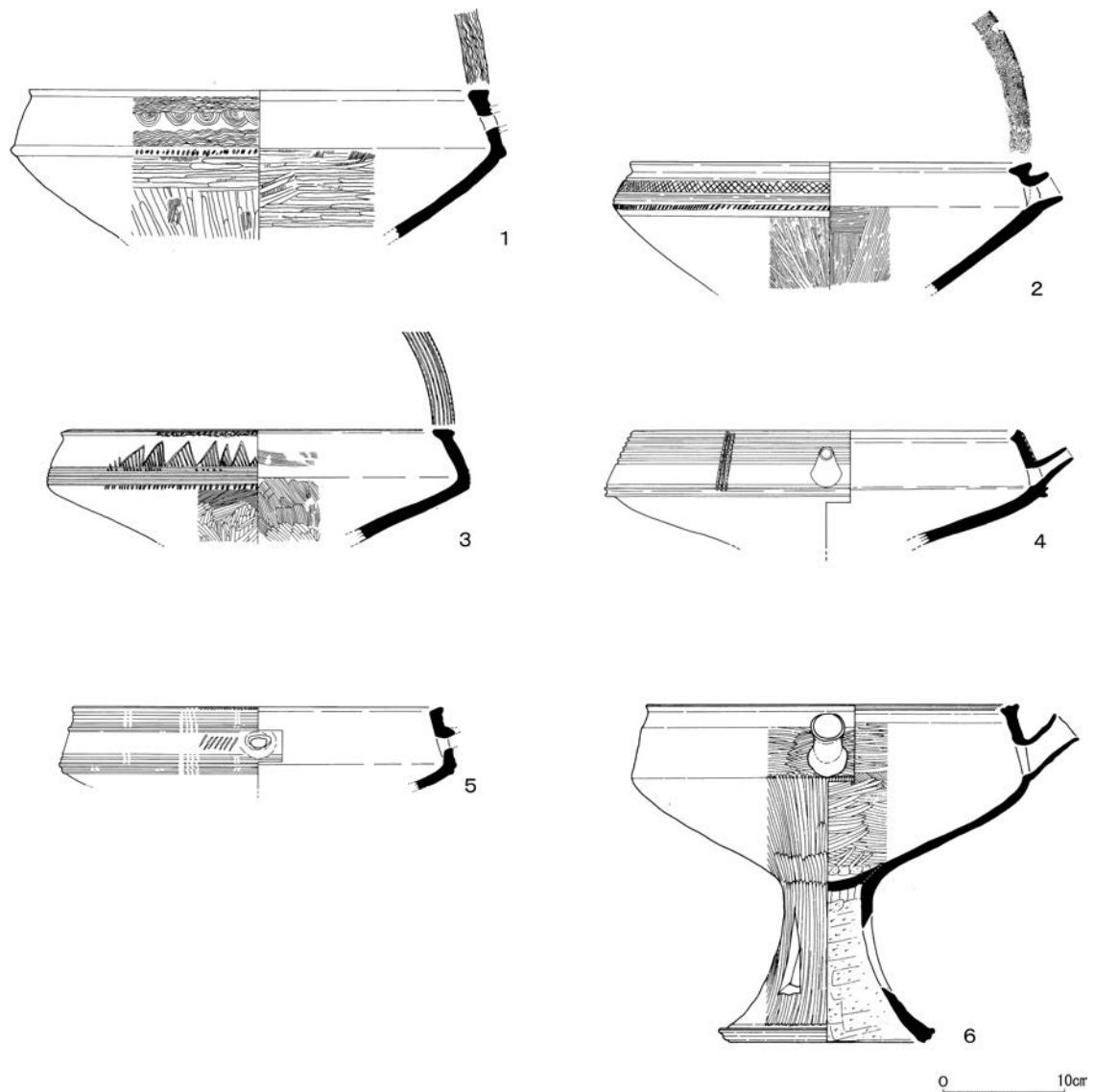
胴部上半が直線的、もしくは丸みを帯びて内傾し、胴部が算盤玉状を呈する一群である。47個体中34個体と最も多い類型で、地域も中四国地方ほぼ全域に広がる。胴部上半の傾きが弱く胴部最大径に対して口径が大きいa類と、胴部上半の傾きが強く胴部最大径に対して口径が小さいb類に細分でき、さらに長脚をもつ1類と短脚をもつ2類に細分が可能である。

A a 1類 (第3図-1~5) いずれも脚部を欠損しているが、おそらく長脚をもつと思われる。塩町式の甕形土器(以下、塩町甕)の分布域と、そのほかでは美作と因幡で出土している。胴部上半の立ち上がりが短く、一見高坏のように見えるが、在地の高坏より大型である。

A a 2類 (第3図-6) 備前の百間川今谷遺跡で1点出土しているのみだが、唯一中期中葉にさかのぼる例である。類例が少なく脚付鉢の出現について言及することはできないが、赤色顔料の塗布がみられ、この段階ですでに特殊な土器として製作されていたことに注目できる。

A b 1類 (第4図-7~第5図-23) 塩町甕分布域と美作、因幡に比較的集中し、そのほか周防、讃岐、阿波から出土している。その中で、塩町甕分布域出土のものは加飾性の高い大型品であり、円盤充填ののちに下から補強粘土を充填するなど、製作技術に共通性がみられる。なお、9は胴部上半に貼付突帯がみられ、やや古い様相を呈する。その他地域では、因幡の青谷上寺地遺跡で加飾性の高い大型品が出土しているが(15)、それ以外は規格性が認められず、各地で様々な個体が製作されたようである。

A b 2類 (第6図-24~第7図-34) 備前・備中南部や阿波に集中する⁽²⁾。前者は在地に多く出土する低脚鉢との関連が考えられ、後者には在地の甕と口縁部が類似するものと、口縁



第3図 脚付鉢① (S=1/6)
1～5 : Aa 1類 6 : Aa 2類

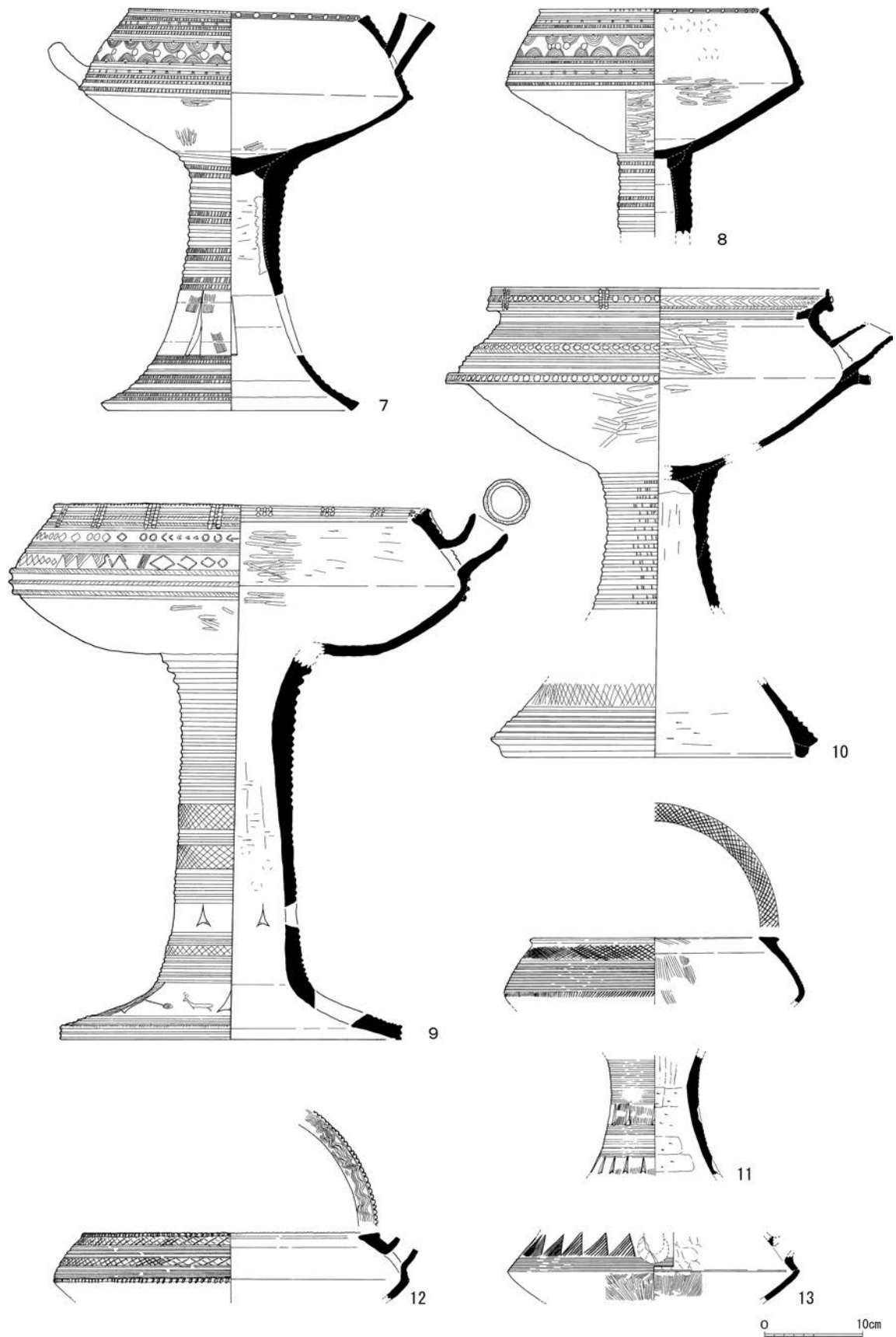
端部を玉縁状に折り返し、胴部が丸みを帯びるものがある。

(2) B類

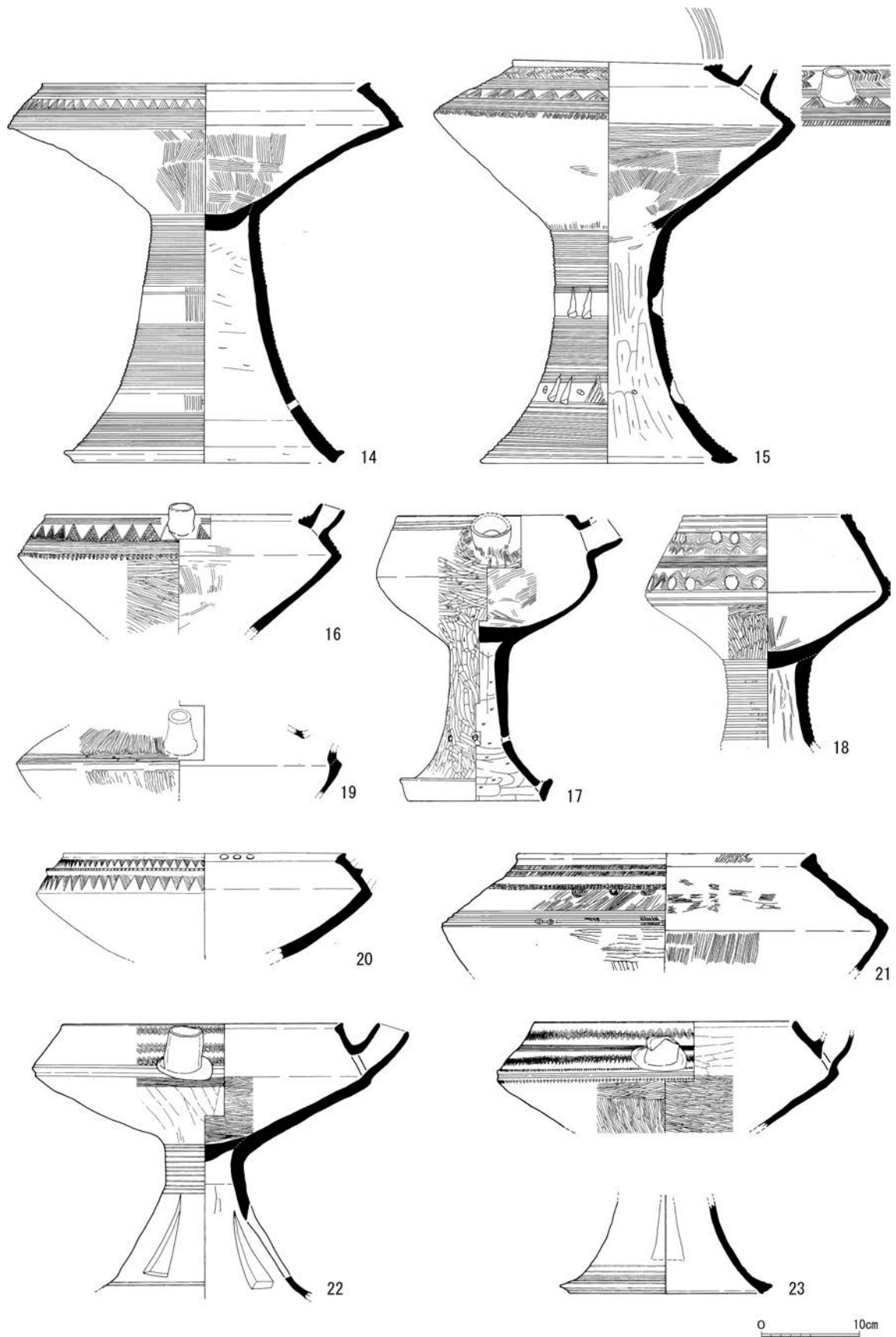
胴部上半が内湾しながら内傾し、「ハ」の字状を呈する一群である。こちらも口径と屈曲部径からa類とb類に細分できるが、いずれも長脚をもつ1類と思われる。備後南部から伯耆西部にかけての山間部に集中する。戸宇大仙山遺跡例(36)を除くと文様構成が類似し、施文に金属器で加工したと思われる鋭利な工具が使われている点が共通することから、a・b類の細分は単なる個体差である可能性が高い。胴部上半の文様は、菱形文を埋める斜線の向きが一部異なるなど、部分的に変化を加える場合が多い。

B a 1類 (第7図-35) 1例のみであるが、備後南部から出土している。注口は確認できないが、器形と文様・施文の共通性から集成した。

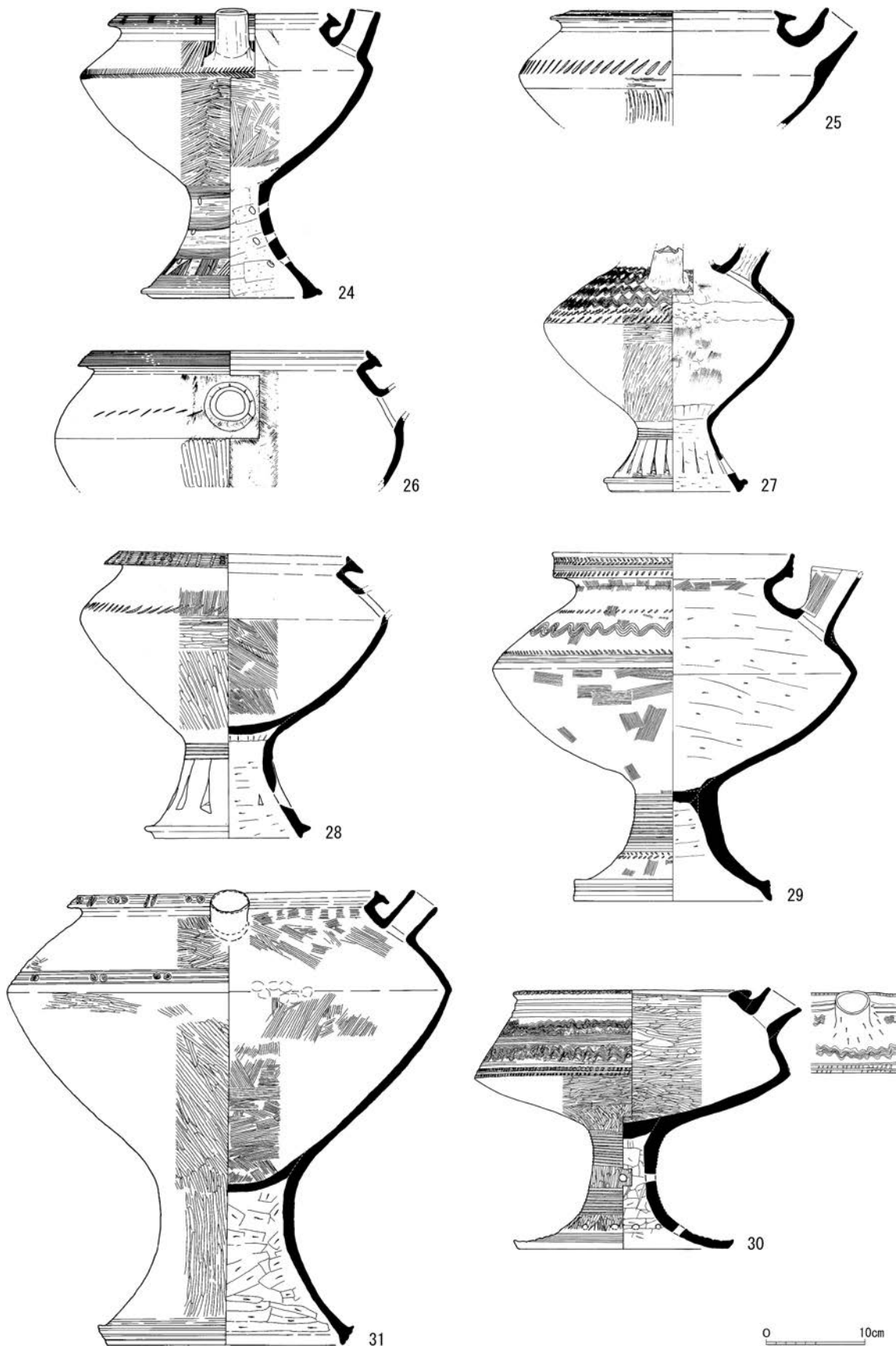
B b 1類 (第7図-36~39) 備後北部から伯耆西部にかけて出土している⁽³⁾。佐田峠3号墓



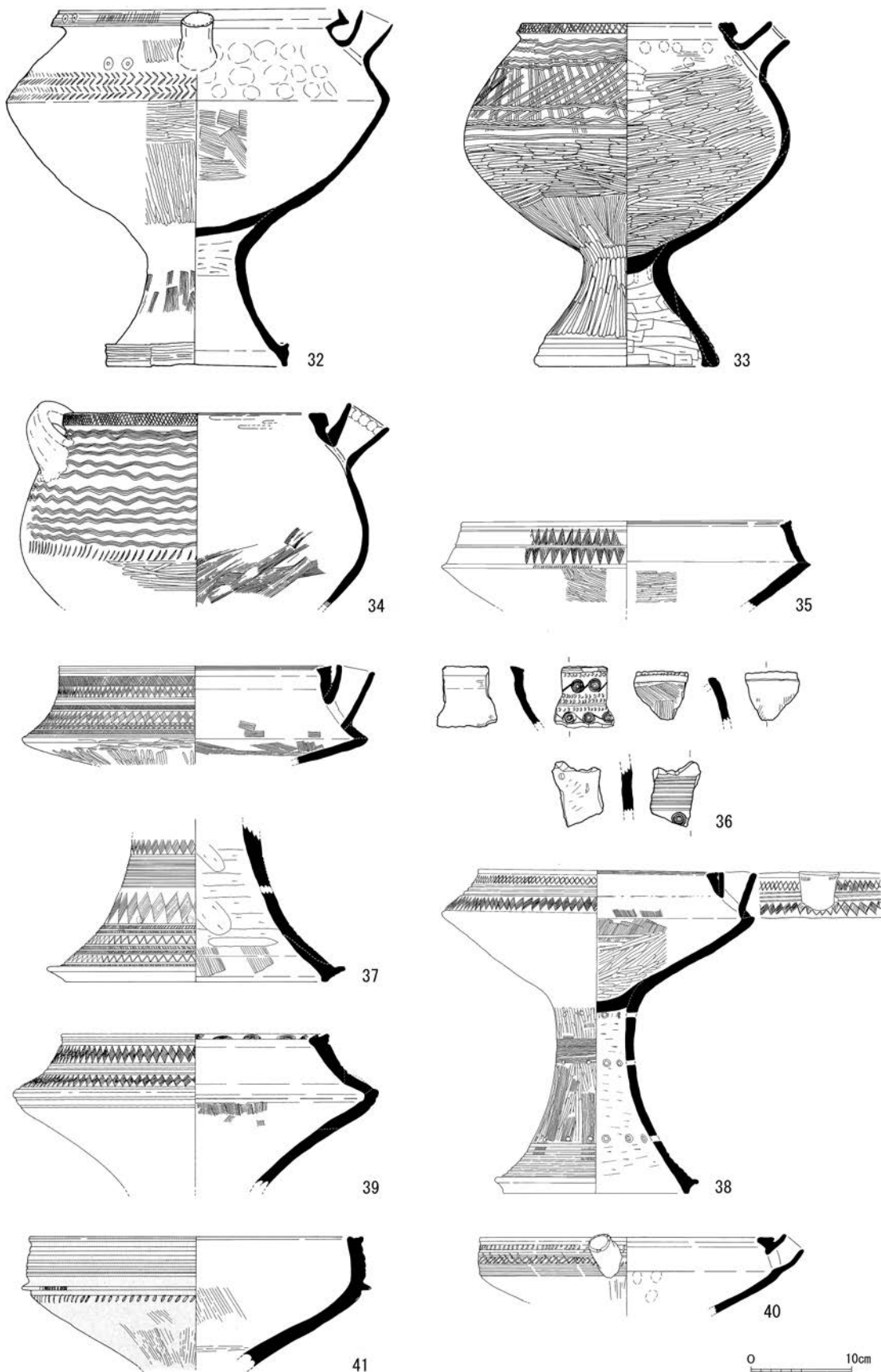
第4図 脚付鉢② (S=1/6)
7~13: Ab1類



第5図 脚付鉢③ (S=1/6)
14~23 : Ab 1類

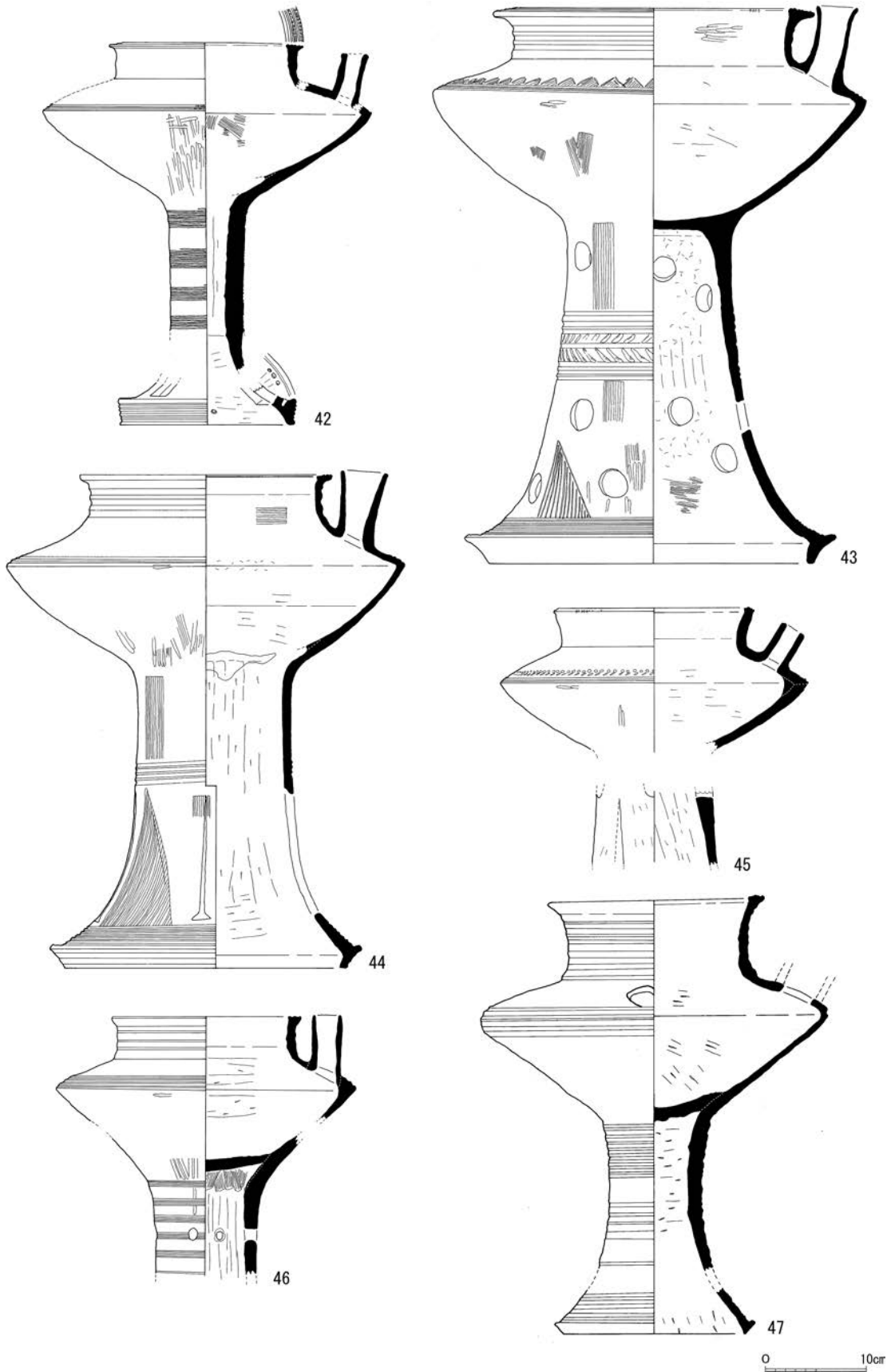


第6図 脚付鉢④ (S=1/6)
24~31 : Ab 2類



第7図 脚付鉢⑤ (S=1/6)

32~34 : Ab 2類 35 : Ba 1類 36~39 : Bb 1類 40・41 : Ca 1類



第8図 脚付鉢⑥ (S=1/6)
42~47 : Db 1類

第 1 表 中四国地方出土脚付鉢一覽

番号	遺跡名	所在	遺構性格	時期	類型	法量 (cm)							頸料	出典
						器高	残存高	口径	屈曲部径	胴部深さ	脚柱部径	底径		
1	山根屋遺跡	岡山県新見市哲西町	包含層	Ⅱ期	A a 1	-	12.0	34.4	40.8	-	-	-	○	竹田・岡本 1977
2	大田茶屋遺跡	岡山県津山市大田	旧河道	Ⅱ期	A a 1	-	10.6	29.6	35.6	-	-	-	-	岡本 1998
3	青谷上寺地遺跡	鳥取市青谷町	溝状遺構	Ⅱ期	A a 1	-	9.3	29.0	35.0	-	-	-	-	湯村 2002
4	佐久良遺跡	広島市安佐北区	墳墓供献?	Ⅱ期	A a 1	-	9.6	30.6	36.9	-	-	-	○	阿部 1984
5	西東子遺跡	東広島市西条町	流路周辺	Ⅱ期	A a 1	-	6.9	28.5	33.3	-	-	-	-	石井・岡田 1996
6	百間川今谷遺跡	岡山市中区	土坑	Ⅰ期前	A a 2	27.5	-	28.4	32.8	14.5	7.2	15.8	○	高畑 1982 広島大学 考古学研究室蔵
7	塩町遺跡	広島県三次市大田幸町	祭祀土坑	Ⅰ期	A b 1	41.5	-	26.0	34.6	15.2	9.7	25.3	○	広島大学 考古学研究室蔵
8	塩町遺跡	広島県三次市大田幸町	祭祀土坑	Ⅰ期	A b 1	-	22.8	21.6	30.5	14.4	7.5	-	○	広島大学 考古学研究室蔵
9	矢原遺跡	広島県世羅郡世羅町	祭祀土坑?	Ⅰ期	A b 1	43.9	-	31.4	42.3	12.8	10.4	30.2	○	潮見 1974
10	殿山38号墓	広島県三次市大田幸町	墳墓上供献	Ⅱ期	A b 1	47.7	-	34.1	63.3	18.2	10.3	29.2	○	道上 1987
11	才地遺跡	岡山県和気郡和気町	住居址埋土	Ⅱ期	A b 1	-	7.2	26.0	36.4	-	-	-	-	下澤 2004
12	久田堀ノ内遺跡	岡山県苫田郡鏡野町	包含層	Ⅱ期	A b 1	-	19.2	21.2	30.6	-	9.0	-	-	弘田 2005
13	久田堀ノ内遺跡	岡山県苫田郡鏡野町	住居址群周辺	Ⅱ期	A b 1	-	7.0	-	30.0	-	-	-	-	弘田 2005
14	法事坊遺跡	岡山市津山市久米町	包含層	Ⅱ期	A b 1	37.7	-	29.8	39.0	13.0	11.2	25.4	○	村上 1979
15	青谷上寺地遺跡	鳥取市青谷町	溝状遺構	Ⅱ期	A b 1	39.7	-	18.5	35.3	16.4	10.9	25.2	-	湯村 2002
16	青谷上寺地遺跡	鳥取市青谷町	溝状遺構	Ⅱ期	A b 1	-	13.4	24.6	33.2	-	-	-	-	湯村 2002
17	青谷上寺地遺跡	鳥取市青谷町	土坑	Ⅱ期	A b 1	29.4	-	17.6	22.4	11.6	6.0	15.6	-	湯村 2002
18	上野遺跡	鳥取県八頭郡八頭町	祭祀遺構?	Ⅱ期~Ⅲ期	A b 1	-	24.0	15.2	24.8	14.0	8.2	-	-	久富ほか 2011
19	旧練兵場遺跡	香川県善通寺市西仙遊町	溝状遺構	Ⅱ期	A b 1	-	6.4	-	33.2	-	-	-	○	狭川 2001
20	紫雲山遺跡	香川県三豊市詫間町	調査区内	Ⅱ期	A b 1	-	11.2	26.4	34.4	-	-	-	○	小林・佐原 1964
21	北原~大法寺遺跡	徳島市阿波市土成町	土坑	Ⅱ期	A b 1	-	12.2	27.3	45.6	-	-	-	-	久保臨 1994
22	垣外遺跡	山口県周南市	溝状遺構	Ⅱ期~Ⅲ期	A b 1	-	28.2	26.8	34.0	12.4	8.0	-	-	清水 2016
23	垣外遺跡	山口県周南市	溝状遺構	Ⅱ期~Ⅲ期	A b 1	-	21.4	26.0	35.2	-	-	19.6	-	清水 2016
24	津寺遺跡	岡山市津寺	包含層	Ⅲ期	A b 2	29.2	-	20.0	30.0	17.0	8.0	15.2	-	大橋 1995
25	津寺遺跡	岡山市津寺	土器溜まり	Ⅲ期	A b 2	-	14.0	21.2	32.0	-	-	-	-	亀山 1996
26	黒住・雲山遺跡	岡山市津寺	土器溜まり	Ⅱ期	A b 2	-	14.0	27.6	35.6	-	-	-	-	正岡ほか 1994
27	百間川兼基遺跡	岡山市兼基	溝	Ⅱ期	A b 2	-	22.8	-	24.8	-	7.2	12.8	-	高田 2007 ノートルダム 清心女子大学蔵
28	上伊福九坪遺跡	岡山市北区	不明	Ⅱ期	A b 2	28.5	-	-	-	-	-	-	-	倉吉博物館蔵
29	長瀬和助北遺跡	鳥取県東伯郡湯梨浜町	不明	Ⅲ期	A b 2	32.2	-	-	-	-	-	-	○	北浦 2001
30	青谷上寺地遺跡	鳥取市青谷町	溝状遺構	Ⅱ期	A b 2	26.8	-	19.5	32.1	13.5	6.5	19.0	-	北浦 2001
31	北原~大法寺遺跡	徳島市阿波市土成町	土坑	Ⅱ期~Ⅲ期	A b 2	46.2	-	29.8	44.9	29.8	13.4	23.5	-	久保臨 1994
32	南庄遺跡	徳島市南庄町	土坑	Ⅱ期~Ⅲ期	A b 2	35.6	-	27.2	38.0	22.0	10.0	16.8	○	妹尾 1992a
33	矢野遺跡	徳島市国府町	土器溜まり	Ⅱ期	A b 2	34.2	-	18.0	32.4	23.4	8.8	14.8	-	近藤・谷川 2006
34	矢野遺跡	徳島市国府町	土器溜まり	Ⅱ期	A b 2	-	19.2	22.0	34.6	-	-	-	-	近藤・谷川 2006
35	御領遺跡	広島県福山市神辺町	溝状遺構	Ⅱ期~Ⅲ期	B a 1	-	8.7	30.3	36.6	-	-	-	-	曾根 2013
36	戸宇大仙山遺跡	広島県庄原市東城町	土壇墓供献	Ⅱ期~Ⅲ期	B b 1	-	24.6	28.4	36.8	-	11.6	-	○	松村 1979
37	佐田峠 3 号墓	広島県庄原市宮内町	墳墓上供献	Ⅱ期~Ⅲ期	B b 1	-	25.7	24.2	34.4	-	-	25.0	○	野島ほか 2009
38	三吉密ヶ塔遺跡	鳥取県日野郡日南町	丘陵斜面	Ⅱ期~Ⅲ期	B b 1	32.0	-	-	-	-	-	-	○	井田直起氏蔵
39	国竹遺跡	島根県仁多郡奥出雲町	祭祀遺構?	Ⅱ期~Ⅲ期	B b 1	-	15.3	22.5	36.3	-	-	-	-	田中・石田 2000
40	曾根田遺跡	岡山市津山市久米町	溝状遺構	Ⅱ期	C a 1	-	8.4	27.2	30.4	-	-	-	-	仁木 2005
41	梅田葦峯遺跡	鳥取県東伯郡琴浦町	墳墓上供献	Ⅱ期	C a 1	-	13.0	30.0	34.8	-	-	-	○	湯村・濱本 2009
42	佐田谷 1 号墓	広島県庄原市宮内町	埋葬施設上供献	Ⅲ期	D b 1	37.7	-	15.8	32.7	13.9	7.5	16.0	○	妹尾 1987
43	佐田谷 3 号墓	広島県庄原市宮内町	埋葬施設上供献	Ⅲ期	D b 1	55.2	-	26.8	43.2	21.1	16.4	31.0	○	今西・辻村 2017
44	佐田谷 3 号墓	広島県庄原市宮内町	埋葬施設上供献	Ⅲ期	D b 1	49.0	-	22.0	39.5	17.5?	15.3	26.5	○	今西・辻村 2017
45	横田遺跡	岡山県新見市哲西町	木棺墓供献	Ⅲ期	D b 1	-	25.3	17.8	30.6	-	11.6	-	○	岡田ほか 1978
46	西江遺跡	岡山県新見市哲西町	祭祀供献	Ⅲ期	D b 1	-	23.3	16.2	29.8	-	10.0	-	○	田中ほか 1977
47	浅井土居敷遺跡	鳥取県西伯郡南部町	建物址周辺	Ⅱ期	D b 1	43.0	-	18.0	34.0	20.5	9.0	17.0	-	間壁霞 1999

出土例 (37) がもっとも緻密な文様をもっている。他地域系の土器と共伴する例が多く、様々ななかたちで祭祀に用いられたようである。

(3) C類

胴部上半が直立する、もしくは外傾する一群である。a類のみが確認でき、脚部は欠損しているが、おそらくすべて長脚をもつ1類であろう。胴部上半が大きく開くことから、鉢というよりも高坏に注口を取り付けたような形態である (第7図-40・41)。

(4) D類

直立する頸部をもち、胴部が壺形を呈する一群である⁽⁴⁾。器形からいざいざもb類で、脚部はいずれも長脚をもつ1類であろう (第8図-42~47)。分布は備後北部と備中北部に集中する。妹尾周三氏により、伯耆西部に分布する「脚台付壺形土器」(以下、脚付壺)の影響が想定されている類型である (妹尾 1992a)。なお、47は、脚付壺の中で唯一注口が確認できた例である。

第2表 脚付鉢編年対応表

	脚付鉢	基準資料	備後	備前・備中	美作	安芸	出雲	伯耆・因幡	周防	讃岐	阿波
	本稿		伊藤 1992	河合 2015	河合 2003	妹尾 1992b	松本 1992	清水 1992	田畑 2014	真鍋 2000	菅原・瀧山 2000
中期中葉			Ⅲ - 1	中期Ⅱ - 1	(Ⅲ - 1)	Ⅲ - 1	Ⅲ - 1	Ⅲ - 1	中期Ⅱ - 2	Ⅲ - 1	Ⅲ - 1
				中期Ⅱ - 2	Ⅲ - 2			Ⅲ - 2		Ⅲ - 2	Ⅲ - 2
			Ⅲ - 2	中期Ⅱ - 3		?	Ⅲ - 2	Ⅲ - 2	Ⅲ - 3	中期Ⅲ	Ⅲ - 3
		百間川今谷遺跡 (6)		中期Ⅱ - 4	Ⅲ - 3						Ⅲ - 3
中期後葉	I期	塩町遺跡 (7)	Ⅳ - 1	中期Ⅲ - 1	Ⅳ - 1	Ⅳ - 1	Ⅳ - 1	Ⅳ - 1	Ⅳ - 1	Ⅳ - 1	Ⅳ - 1
	Ⅱ期	殿山38号墓 (10)	Ⅳ - 2	中期Ⅲ - 2	Ⅳ - 2	Ⅳ - 2	Ⅳ - 2	Ⅳ - 2	中期Ⅳ - 2	Ⅳ - 2	Ⅳ - 2
				中期Ⅲ - 3	Ⅳ - 3			Ⅳ - 3		Ⅳ - 2	Ⅳ - 2
後期前葉	Ⅲ期	佐田谷1号墓 (42)	Ⅴ - 1	後期Ⅰ - 1		Ⅴ - 1古	Ⅴ - 1	Ⅴ - 1	後期Ⅰ - 1	Ⅳ - 3	Ⅴ - 1
		後期Ⅰ - 2			Ⅴ - 1						
		後期Ⅰ - 3			Ⅴ - 1新					Ⅴ - 2	

3. 資料の分析

(1) 各属性の分析

時期 (第1表、第2表) 脚付鉢の時期は、基本的に妹尾周三氏の時期区分 (妹尾 1992a) を踏襲する。妹尾氏は、備後北部の甕を文様や胴部内面ヘラケズリの範囲によって編年し、『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』の「備後地域」(伊藤 1992) におけるⅣ - 1 様式、Ⅳ - 2 様式、Ⅴ - 1 様式にそれぞれ対応するものとしてⅠ期、Ⅱ期、Ⅲ期を設定している。本論では、同じく「脚付鉢Ⅰ期」、「脚付鉢Ⅱ期」、「脚付鉢Ⅲ期」と区分するが、後者二期間の中間の様相を呈する一群が抽出されたため、それらを「脚付鉢Ⅱ期～Ⅲ期」として区別する。その他地域については、各地域編年との併行関係をもとに比定した。

脚付鉢Ⅰ期 塩町遺跡 (7) を基準とする。共伴する甕は胴部内面ヘラケズリがみられないものや底部付近に限定されるもののみである。脚付鉢は加飾性が高く、脚端部はあまり発達せず開く。

脚付鉢Ⅱ期 殿山38号墓 (10) を基準とする。共伴する甕の胴部内面ヘラケズリが胴部上半付近まで施され、口縁部は上下に拡張される。脚付鉢は脚付鉢Ⅰ期と同じく加飾性が高いが、脚部が立ち上がり、脚端部も拡張される。

脚付鉢Ⅲ期 佐田谷1号墓 (42) を基準とする。共伴する甕に重層刻目文がほとんどみられなくなり、胴部内面ヘラケズリが普及する。脚付鉢は胴部が壺形を呈するようになる。

文様 (第9図 - 1) 各脚付鉢の文様を抽出し、分析を行った。結果として、類型による偏りは少なく、地域性が顕著に表れていることがわかった。重層刻目文は、備後北部を中心に分布する塩町式土器の指標となっており、同地域にみられる脚付鉢Ab類に施される。刻目文、斜格子文、鋸歯文、波状文などはAb類に多く施される傾向にあるが、地域別にみると美作から因幡にかけての地域で出土する脚付鉢に施されている。当該地域では他器種にもこれらの文様が多用されており、在地の文様構成を反映していると考えられる。菱形文はBa・b類のみに施され、施文に金属器で加工したと思われる鋭利な工具を使用し、中を斜線で埋め

る点が共通する。扇状文や綾杉文は銅鐸との関連が指摘されている文様で（伊藤 2011）、備後北部のAb類に施されることが多い。そのほか、円形浮文や棒状浮文は弥生時代中期以前から続く文様で、脚付鉢Ⅱ期以前の脚付鉢に施されるが、やがてみられなくなる。刺突列点文、櫛描直線文、竹管文は、類型や時期、地域を限定することなく施される。

以上のことから、備後北部から伯耆西部にかけては脚付鉢を特に多くの文様で飾る傾向が強く、備前・備中南部、美作、因幡では在地の土器文様と共通する文様で飾られ、施分量も他器種と大差ないことがわかった。一方で、Ba・b類の中を斜線で埋める菱形文など、特定の類型に特定の文様を施すものもあり、これらは同じ思想的背景のもとで製作され、その使用者は同じ思想を共有する人々としてある程度のまとまりを考えられる。類型よりも地域差として捉えられる文様と、ある類型にのみ使用される文様が存在するようである。

胴部下半内面調整（第9図－2）注口の存在から中に液体を入れるという使用方法を想定した場合、最もそれに関係する胴部下半内面の調整を分析に用いた。第9図－2には類型別の調整を示したが、これは地域や時期をあわせて考える必要がある。

まず、備後・備中北部を中心に、Ab類にミガキ調整（脚付鉢Ⅰ・Ⅱ期）、Ba・b類にハケ調整（脚付鉢Ⅱ期～Ⅲ期）、D類にケズリ調整（脚付鉢Ⅲ期）というおおまかな変化が追える。胴部下半内面へのミガキ調整は水分を染み込みにくくする効果があると考えられ、脚付鉢の実用的な使い方が想定できる調整と言える。それが大型の脚付鉢Ab類に施され、その後器形の変化とともに粗雑化していく。美作から因幡にかけては、類型に関わらず胴部下半内面をハケによって仕上げる、またはハケ調整後にそれをナデ消すことが多い。これは、当該地域の他器種と同様の調整方法であり、文様構成と同じく特殊な地域性を示すものではない。

以上のことから、備後・備中北部では、時期による調整方法の変化が追え、美作から因幡では他器種との共通性が見出された。また、使用用途に最も適したミガキ調整が時期の変化とともに衰退しており、その使用方法にも変化があった可能性がある。

出土遺構（第9図－3）脚付鉢の出土遺構は、一部類型による偏りもみられるが、結果として地域性が強く反映されている。備後北部から伯耆西部にかけては、類型・時期に関わらず、墓上供献もしくは祭祀遺構という出土状況を示しており、それ以外の地域では、墓上供献や祭祀遺構もみられるが、土坑や住居址、土器溜まり、溝状遺構など様々な出土状況を示す。前者の地域では、脚付鉢に赤色顔料が塗布される場合が多く、祭器として利用されていた可能性が高い。後者の地域では、それぞれの集団によって選択的に使用されていたと考えられ、脚付鉢が分布するすべての地域で、同様の思想が共有されていたわけではないようである。このような現象は、備前・備中南部を中心に分布する脚付長頸壺形土器でもみられ（村田 2016）、一般的な事象と考えられる。

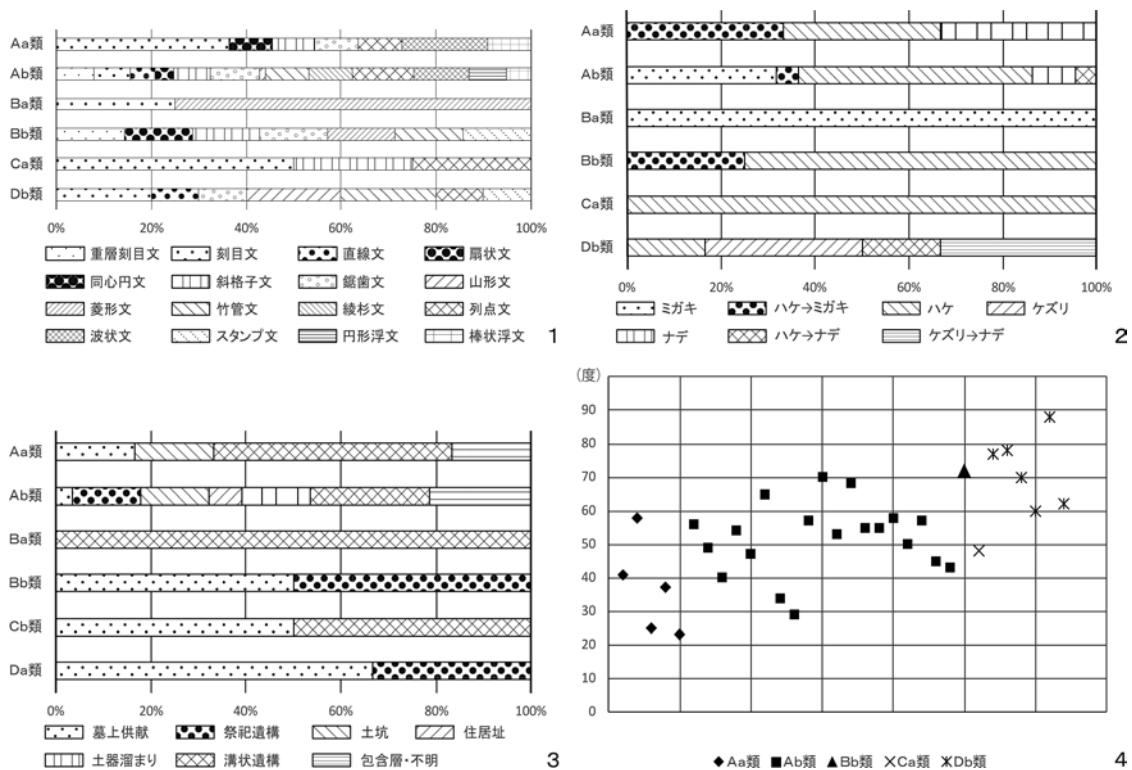
注口取り付け方法と角度（第9図－4）注口の取り付け方法には、大きく差込式と貼付式がある。差込式は、備後北部の大型で加飾性の高いAb類やDb類に多く採用され、それ以外の地域では貼付式が多く採用されている。これらのことから、前者の地域では加飾性の高い大型脚付鉢を製作する技術がある程度固定化され、それを製作できる集団も限られていたと

推定できる。その他の地域では、在地の高坏や低脚鉢をもとに注口を貼り付けて製作される場合が多かったと考えられる。

つづいて、注口の取り付け角度であるが⁽⁵⁾、脚付鉢Ⅲ期に製作されるD b類は注口の取り付け角度が大きく、中にはほぼ真上を向く個体もみられる。これは頸部が付くことによって胴部上半の立ち上がりが弱くなるという器形的制約もあるが、注口が痕跡器官（ルジメント）化したという捉え方もできる。注口は本来、液体を注ぐためのもので、垂直に近づくほど注ぎにくくなる。このようなことから、脚付鉢は胴部に液体を入れてそれを注ぐといった実用的な使い方から、注口が意味をなさない使い方に変化したと考えられる。これは胴部下半内面調整の分析で得られた知見とも一致している。

(2) 小 結

以上のように、脚付鉢をさまざまな要素から検討した。まず、時期と類型については、全時期を通して継続的に脚付鉢が製作されるのは備後北部のみで、その他地域ではおおむね脚付鉢Ⅱ期に集中し、後続する例はほとんどない。また、類型別に見ると、C a類は類例が少なく詳細は不明であるが、B a・b類は脚付鉢Ⅱ期～Ⅲ期の備後北部周辺に、D b類は脚付鉢Ⅲ期の備後北部周辺でのみみられ、中四国地方に広く分布するのはA a・b類である。ただ、同じ類型でも細部は異なる部分が多く、各地域で製作され使用されたと考えられる。結果として、類型と各要素に関係が認められる備後北部周辺と、類型差よりも地域差として捉えるべき地域とに大別できると考えられる。



第9図 脚付鉢の諸要素

1：文様構成 2：胴部下半内面調整 3：遺構 4：注口角度

4. 考 察

(1) 分布と類型について

脚付鉢は備後北部に加飾性の高い大型品が集中し、製作の中心地であったと考えられる。今回の集成では弥生時代中期中葉から後期前葉の注口をもつ土器を集成したことによって、その分布は中四国地方全域に広がった。しかし、脚付鉢が距離を隔てた地域に搬入されることはなく、これらすべての土器を脚付鉢として同等に扱うにはやや疑問が残る。本節では、中四国地方全域に広がるこれらの土器の関係性を検討する。

まず、備後北部であるが、脚付鉢はこれまで文様の共通性と共伴例から塩町式土器を構成する器種の一つとされてきた。重層刻目文を指標とする塩町甕については、多くの個体で重層刻目文と対応する位置に粘土紐の接合痕がみられることから、重層刻目文が粘土圧着機能をもつことが指摘されている⁽⁶⁾。これをふまえて備後北部の脚付鉢を見ると、塩町甕と併行する時期の脚付鉢にはもれなく重層刻目文が施され、脚柱部や屈曲部で粘土紐接合痕との重なりが確認できた。また、同時期に備後北部で出土する注口をもたない小型の脚付鉢（第11図-55～59）にみられる円盤充填後に下方から粘土で補強する接合方法が脚付鉢にも行われており、やはり塩町式土器と脚付鉢は同じ土器型式として捉えて良いと考えられる。

重層刻目文が施された脚付鉢は、塩町甕の分布域を出ることはなく、一見するとその他の地域の脚付鉢とは関連性がないように思える。しかし、青谷上寺地遺跡例（15）や北原大法寺遺跡例（21）、垣外遺跡例（22・23）など、在地の土器型式にはない形態で、明らかに備後北部とのつながりが考えられるものもある。青谷上寺地遺跡は、山陰地方の拠点集落のひとつであり、計5点の脚付鉢が出土している。当遺跡では美作の土器様式に類似する土器が一定の割合を占め、在地で主体を占める土器だけでなく、隣接した地域の一部型式を在地産として共有していたことがわかっている（河合 2003・2005）。つまり、周辺地域との交流が活発に行われていたと言え、こうした拠点集落を通して二次的な模倣が起こった可能性がある。備前・備中南部では、注口をもたない低脚鉢が多く分布しており、それらをもとにして脚付鉢Ab2類が製作されたことは確実である。これらの注口は実用的な角度で取り付けられており、在地で発生したものであれば、注口をもつ個体が一定量を占めてもよいはずである。しかし、現状では常用土器として定着しているとは言い難く、また時期幅などから同地域の百間川今谷遺跡例（6）との関連は考えにくい。ここでは二次的な模倣によって少数製作されたものの、定着することなく短期間のうちに製作されなくなったと想定したい。讃岐や阿波での出土例も在地で発生したものは考えられず、おもに備前・備中南部との交流の中で製作されたと考えられる。旧練兵場遺跡は、弥生時代中期後葉から後期前葉に吉備系土器が多く出土し（角南 2001）、その地理的位置からも吉備との密な交流が行われていたと考えられる。その他讃岐や阿波で脚付鉢が出土した遺跡も、周辺の拠点集落と考えられる大規模な遺跡であり、そうした遺跡で脚付鉢も出土する傾向が指摘できる。

以上のように、脚付鉢Ⅱ期に中四国地方に広がる脚付鉢は、その形態的特徴や加飾性の高さを失いながらも、備後北部からの影響が少なからずあったのではないかと考えられる。そ

の出土遺構は、祭祀性の強いものもあれば、出土遺構が共通しないものもあり、選択的に使用されていたと考えられる。

(2) 鉢形から壺形への変化 (第10図)

脚付鉢は、脚付鉢Ⅲ期になると胴部が鉢形から壺形に変化する。妹尾周三氏は、その要因を伯耆西部に分布する脚付壺に求めた(妹尾 1992a)。本論に際して改めて集成すると、5遺跡から8個体が確認でき、分布はやはり同地域に集中するようである。妹尾氏の集成以来、出土数はほとんど伸びておらず、それほど一般的な器種ではなかったと考えられるが、注口をもつ例が新たに確認できた(第8図-47)。

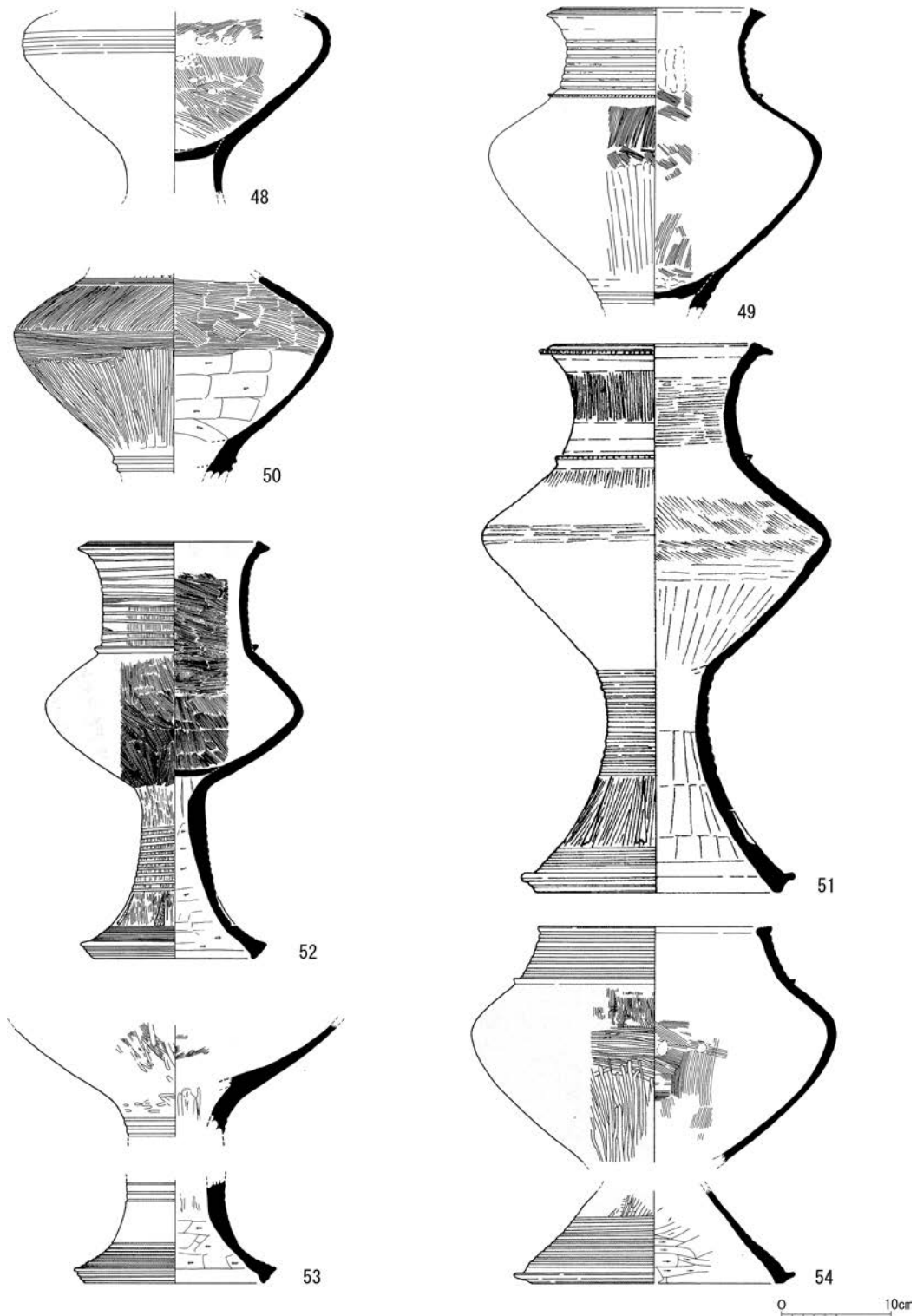
時期は脚付鉢と同じく共伴遺物もしくは自身の型式学的特徴によって比定した(第3表)。脚付鉢Ⅰ期併行からみられ、頸部下端に貼付突帯と刻目文を施す例が多い。また、ほとんどの例に赤色顔料が施され、出土状況も明確な遺構に伴い、他の土器とともに一括で出土することが多い。遺構は埋葬施設や祭祀遺構が多いようである。長山馬籠遺跡例(50)は竪穴状の祭祀遺構から鉄斧と吉備南部系の器台を伴って出土し(益田ほか 1989)、笠見第3遺跡例(53)は土坑から鉄製鉈とともに出土している(戸羽 2007)。これらのことから、脚付壺は何らかの祭祀に使用された後廃棄されるというような使用方法が想定できる。

文様は凹線文や沈線文など比較的簡素な文様が施されることが多い。胴部下半内面の調整はハケで仕上げるものが多く、在地の甕や壺をみると、胴部下半をケズリ、上半をハケで仕上げるのが一般的なようであり、ケズリをあまり用いないという点では脚付壺の方が丁寧と言えるかもしれないが、ミガキをほとんど用いないという点では在地の土器内面調整と類似した調整方法と言える。いずれにしても同時期の備後北部でみられる脚付鉢とは調整方法が異なり、在地で発生して製作された土器と言える。

以上のように伯耆西部に分布する脚付壺についてまとめた。注口が付く例が備後北部につながる日野川流域から出土しており、妹尾氏の指摘通り脚付壺が脚付鉢Db1類に影響を与えた可能性も考えられる。しかし、脚付壺が脚付鉢Ⅱ期併行期で衰退するのに対し、脚付鉢の胴部が壺形に変化するのは脚付鉢Ⅲ期に入ってからであり、現状ではその影響を肯定することはできない⁽⁷⁾。Db1類の胴部は、比較的大きな口径をもつ直口壺形を呈し、胴部中位の明瞭な屈曲部には粘土紐接合痕が観察できる。このような壺は備中・備後南部に散見されるが、それほど一般的な器形ではない。ただ、Db1類が集中して出土する佐田谷墳墓群では、共伴土器に備中・備後南部との関係が強い土器群が多くみられることから、Db1類も脚付壺からの影響ではなく、備中・備後南部との関わりの中で生み出されたと考えられる。

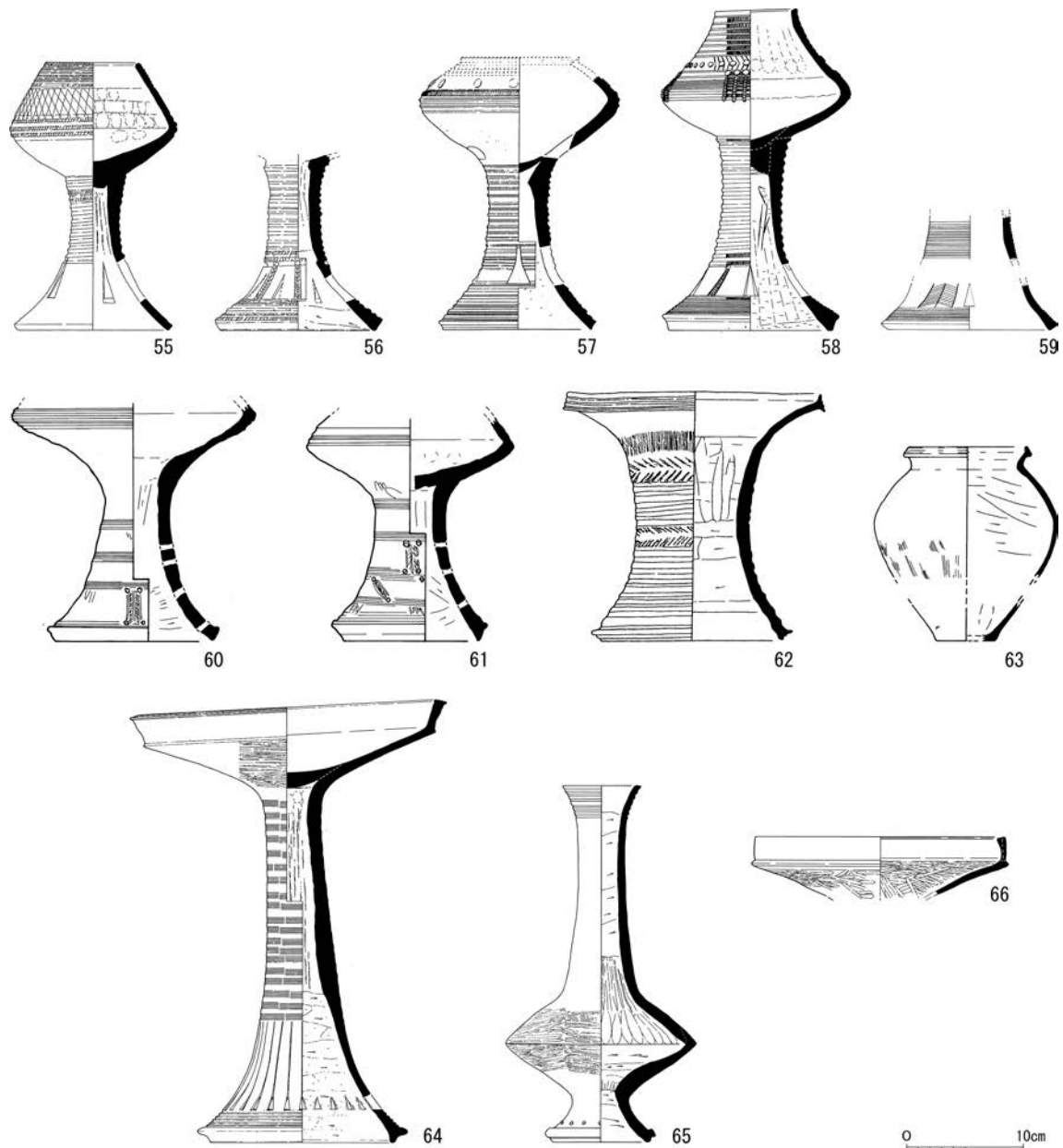
(3) 脚付鉢と弥生墳丘墓

本節では、脚付鉢が祭祀性の強い出土状況を示す備後北部とその周辺地域について、脚付鉢と墳丘墓の関係性を検討する。備後北部では、脚付鉢Ⅰ期から明確な墳丘をもつ墳丘墓が築造されるが、脚付鉢は墓域外での祭祀に用いられる。一方、墳丘墓では塩町式土器が供献され、その中には注口をもたない小型の脚付鉢が含まれるが、胴部形態に規格性はなく様々な形態が製作される(第11図-55~59)。



第10図 脚付壺 (S=1/6)

脚付鉢Ⅱ期に入ると各地で墳丘墓の築造がはじまり、備後北部でも四隅突出型墳丘墓に脚付鉢が伴うようになる。同時期の伯耆では、梅田萱峯弥生墳丘墓に脚付鉢Ca 1類が供献され、妻木晩田遺跡洞ノ原2号墓からは備後北部に類例がある円形透かしと直線文、羽状文を組み合わせた文様をもつ小型の脚付鉢が出土している（第11図-60・61）。ただ、これらは在地



第11図 脚付鉢関連土器 (S=1/6)

55～59：備後北部出土の小型脚付鉢 60～63：伯耆西部出土他地域系土器
64～66：佐田谷・佐田峠墳墓群出土他地域系土器

製と考えられ、備後北部から大型の脚付鉢が搬入される様相はみられない。また、これらが出土した墳丘墓はいずれも方形貼石墓であり、備後北部のように隅部を意識した構造になっていないことにも注目できよう。

脚付鉢Ⅲ期になると備後北部だけでなく、山陰地方でも四隅突出型墳丘墓が築造されはじめる。山陰地方の四隅突出型墳丘墓に脚付鉢が供献されることはないが、備後に系譜をもつ甕や備後南部から搬入された器台⁽⁸⁾などがみられ(第11図-62・63)、ひきつづき何らかのつながりは維持されていたと思われる。一方、備後北部では佐田谷・佐田峠墳墓群でのみ脚付鉢Db 1類が墳丘墓の埋葬施設直上に供献される。その中で、同墳墓群ではほかに備後・

第3表 脚付鉢関連土器一覧

番号	遺跡名	所在	遺構性格	時期	法量 (cm)							顔料	出典
					器高	残存高	口径	屈曲部径	胴部深さ	脚柱部径	底径		
48	名和飛田遺跡	鳥取県西伯郡名和町	土坑	I期～II期	-	16.8	-	28.2	-	-	-	-	北・三木 2005
49	石州府第1遺跡	鳥取県米子市	土城墓	I期	-	27.4	17.5	30.5	31.6	9.2	-	○	小原 1983
50	長山馬籠遺跡	鳥取県日野郡溝口町	堅穴祭祀	II期	-	18.4	-	29.2	-	-	-	○	益田ほか 1989
51	後中尾遺跡	鳥取県倉吉市	不明	I期	50.0	-	18.0	32.0	30.0	9.0	22.0	○	森下 1996
52	笠見第3遺跡	鳥取県東伯郡東伯町	貯蔵穴	II期	38.1	-	15.6	23.6	21.0	6.0	14.4	○	西川 2004
53	笠見第3遺跡	鳥取県東伯郡東伯町	土坑	II期	-	30.3	18.4	33.4	-	-	22.4	○	戸羽 2007
54	笠見第3遺跡	鳥取県東伯郡東伯町	段状遺構	II期	-	19.2	-	-	-	8.8	16.0	○	戸羽 2007
55	宗祐池西遺跡	広島県三次市	墳丘墓周溝	I期	23.0	-	6.9	18.2	8.1	4.2	12.3	-	尾本原 2000
56	宗祐池西遺跡	広島県三次市	墳丘墓周溝	I期	-	14.4	-	-	-	4.5	12.6	-	尾本原 2000
57	四拾貫小原遺跡	広島県三次市四拾貫町	墳丘墓斜面	I期	-	20.0	-	15.9	-	4.8	11.7	-	今福 2016
58	新迫南遺跡	広島県安芸高田市高宮町	区画墓	II期	26.4	-	6.9	15.6	10.8	5.1	12.6	-	加藤 1979
59	新迫南遺跡	広島県安芸高田市高宮町	区画墓	II期	-	7.5	-	-	-	6.9	13.2	-	加藤 1979
60	妻木晩田遺跡	鳥取県西伯郡大山町	墳丘墓供献	II期	-	11.4	-	11.7	-	3.3	6.7	-	岩田ほか 2000
61	妻木晩田遺跡	鳥取県西伯郡大山町	墳丘墓供献	II期	-	11.1	-	10.2	-	3.6	6.6	-	岩田ほか 2000
62	尾高浅山遺跡	鳥取県米子市	墳丘墓供献	III期	21.4	-	16.2	-	-	7.5	11.7	-	小原 2015
63	妻木晩田遺跡	鳥取県西伯郡大山町	墳丘墓供献	III期	-	14	10.0	15.6	-	-	5.0	-	岩田ほか 2000
64	佐田谷1号墓	広島県庄原市宮内町	埋葬施設上	III期	38.7	-	26.7	25.8	5.9	5.0	15.6	○	妹尾 1987
65	佐田峠2号墓	広島県庄原市宮内町	埋葬施設上	III期以降	30.7	-	6.8	16.4	25.8	4.8	8.0	-	野島ほか 2009
66	佐田峠3号墓	広島県庄原市宮内町	埋葬施設上	II期～III期	-	5.1	20.1	22.1	-	-	-	○	野島ほか 2009

備中南部から搬入された土器がみられる（第11図-64～66）。

このような当該地域の土器移動の様相をふまえ、佐田谷・佐田峠墳墓群の先行研究を援用しながら脚付鉢の性格を検討する。当墳墓群では、佐田峠3号墓でBb1類、佐田谷1号墓でDb1類、佐田谷3号墓でDb1類が出土している（第7図-37、第8図-42～44）。同じ類型に属するものでも形態が異なっており、脚部の形態や文様などに他地域の影響がみとれることから、需要が発生するたびに交流の中で得られたさまざまな地域の特徴を収斂するかたちで製作された祭器と考えられる。また、その供献方法も異なっており、佐田峠3号墓では墳丘上に完形のまま供献し（野島ほか 2009）、佐田谷1号墓では別の場所で破砕し埋葬施設直上に供献する（妹尾 1987）。佐田谷3号墓では完形のまま墳丘上に供献する。このような供献方法の変化と合わせ、佐田谷・佐田峠墳墓群では時期による埋葬施設の構築方法の変化が指摘されている。すなわち、墓壙掘削と埋葬・封土の一連の行為が墳丘構築過程として数回繰り返して行われる「同時進行型」から、墳丘構築とおおよその整形が行われた後に墓壙が掘削される「墳丘先行型」への変化である（今福 2012、野島 2015）。これについて、野島氏は「埋葬される被葬者達の社会的地位の変容とともに、その死に際して葬送儀礼が変化し始めたことによるもの」（野島 2015、8頁）と指摘している。佐田谷3号墓の埋葬施設は調査が行われていないものの、木棺・木槨構造を備える佐田谷1号墓よりも大規模な墓壙掘方が検出されており、（今西・辻村 2017）、そこには集成脚付鉢中最大の器高をもつDb1類が供献される。これは埋葬施設の構築方法や墓壙規模の変化と相関しており、高い社会的地位を占有する被葬者が登場したことを示すと考えられる。

以上のように、備後北部を中心に脚付鉢と弥生墳丘墓の関係性について検討した。脚付鉢II期以降にみられる脚付鉢はいずれも墳丘墓からの出土であり、当該地域において葬送儀礼の重要性が高まった様相が窺える。特に佐田谷・佐田峠墳墓群では、中国地方でいち早く木棺・木槨構造を備える墳丘墓が登場し、そこに脚付鉢が供献された意義は大きい。多くの吉備系土器が共伴するなかで、中期後葉からつづく、備後北部の伝統的な祭器である脚付鉢を

使用した祭祀が執り行われたのである。佐田谷・佐田峠墳墓群より後出する墳丘墓には脚付鉢が供献されることはなく、後期後半まで墳丘墓の造営自体がそれほど活発ではなくなる。徐々に衰退したというよりも、佐田谷・佐田峠墳墓群の造営を機に突然衰退したという印象が強い。本墳墓群の造営を境に備後北部の社会に大きな変化がもたらされたと考えられるが、それについては今後の課題としたい。

5. おわりに

近年検討が行われていなかった脚台付鉢形土器について、器形による分類、分布の特徴、文様・調整から包括的に捉えることを試みた。内容をまとめると、脚付鉢は加飾性の高い大型品が備後北部に集中するものの、弥生時代中期後葉には中国地方や一部四国地方にも広がりをみせる。備後北部周辺では、脚付鉢が祭器として製作され、祭祀性の強い出土状況を示すが、その他地域では出土遺構に偏りはなく、選択的に使用されていたことがわかった。また、弥生墳丘墓との関係についても検討し、備後北部では脚付鉢が葬送儀礼の中で重要な位置を占めていたことを指摘した。

さいごに、脚付鉢の製作集団について少し言及したい。出現期の脚付鉢と塩町甕は同じ製作集団によって製作されたことは再確認できた。しかし、それ以降は器形や文様構成など、他地域からの影響が強く感じられる。これは、脚付鉢の製作集団が他地域との交流の中で得られた情報を脚付鉢に反映させながら製作していたためと考えられる。瀬戸内側と山陰側の中間地点に位置するという地理的環境により、周辺地域からの情報を入手しやすかったのだろう。塩町甕の分布域とはやや異なる交流圏がみて取れる様相は、日常的な交流とは異なり、脚付鉢を用いた交流に葬送儀礼をはじめとする祭祀が伴っていた可能性を示している。今後は、細かい脚付鉢の製作地を把握することが大きな課題となってくる。実見した中でも各脚付鉢の胎土・色調は一樣ではなく、比較的短い距離での土器の移動が頻繁に起こっていたと考えられる。これらの製作地を比定できれば、より細かい交流圏を把握することができ、当時の社会の変化をより具体的に論じることができるだろう。

謝 辞

本論は2017年1月31日に広島大学文学部に提出した卒業論文に加筆・修正を加えたものである。本論文を作成するにあたり指導教官の野島永教授をはじめとし、古瀬清秀名誉教授、ウェルナー・シュタインハウス客員准教授などの諸先生方には様々にご指導を賜り、印刷の際には事務の中村典江さんに多くのお手数をおかけしました。特に野島永教授には弥生土器に関する御教示、学外機関への斡旋など多方面にわたってお世話になりました。深く感謝申し上げます。

また、資料調査の際には様々な個人、機関にお世話になるとともに、多くの御教示をいただきました。庄原市教育委員会の今西隆行氏、鳥取県埋蔵文化財センターの久保穰二郎氏、君嶋俊行氏、大川泰広氏、古代吉備文化財センターの尾上元規氏、河合忍氏、森本直人氏、

藤井翔平氏、米子市文化財団の佐伯純也氏、広島県立歴史民俗資料館の島田朋之氏、村田晋氏、東広島市教育委員会の妹尾周三氏、鳥取県むきばんだ史跡公園の高尾浩司氏、三次市教育委員会の友廣美和氏、山崎明日香氏、津山市弥生の里文化財センターの豊島雪絵氏、米子市教育委員会の中原康介氏、高橋浩樹氏、ノートルダム清心女子大学の紺谷亮一氏、広島県埋蔵文化財調査センターの順田千織氏、倉吉博物館館長の根鈴輝雄氏、同学芸員の小田芳弘氏、南部町教育委員会人権・社会教育課文化財担当の佐藤伸之氏にはご迷惑をおかけしているにもかかわらず、資料調査を快諾してくださり様々なご配慮をいただきました。記して感謝いたします。また、青谷上寺地展示館、倉吉博物館、広島県教育委員会、広島県立歴史民俗資料館の皆様にも資料調査の際に大変お世話になりました。さいごに、広島大学考古学研究室の学部生、大学院生の皆様には日頃の議論の中で様々なご意見をいただき、本論の製作に活かすことが出来ました。感謝いたします。

註

- (1) 当該地域では、図示したもの以外にも脚付鉢の可能性のある小破片が出土している。器形の断定ができないため本論では扱っていないが、以下に列挙しておく。山根屋遺跡（竹田・岡本 1977）：注口、岡山県新見市哲西町野田畝遺跡（福田・高畑 1977）：脚柱部・胴部片、鳥取県日野郡日南町丸山大洞遺跡（柱本・長谷部 1990）：注口、梅田萱峯遺跡（湯村・濱本 2009）：注口、佐田谷 1 号墓（妹尾 1987）：脚柱部・脚部片・注口、胴部・脚部片、佐田谷 3 号墓（今西・辻村 2017）：口縁部片・注口、佐田峠 1 号墓（野島 2016）：脚柱部・脚部片である。
- (2) 28はこれまで実測図が未公表であったが、ノートルダム清心女子大学にて実見させていただき、文学部現代社会学科教授の紺谷亮一氏や学芸員課程の佐々江氏に大変お世話になりました。また、実測図の公表を快諾していただきました。記して感謝いたします。29もこれまで実測図が未公表であったが、倉吉博物館にて実見させていただき、館長の根鈴輝雄氏や学芸員の小田芳弘氏に大変お世話になりました。また、実測図の公表を快諾していただきました。記して感謝いたします。32はこれまで現地説明会資料のみでの公表であったが、今回資料を手に入れることができなかつたため、（妹尾 1992a）より引用させていただいた。今後、実見する予定である。
- (3) 38は存在を知った当時実測図が未公表でしたが、米子市埋蔵文化財センターにて実見させていただき、主任調査員の高橋浩樹氏に大変お世話になりました。また、土器所有者の井田直起氏には実測図の公表を快諾していただきました。記して感謝いたします。なお、現在は『新鳥取県史』にて一括出土遺物が公表されており、遺跡名も「三吉密ヶ塚山遺跡」となっている（湯村 2017a）。
- (4) 43・44は庄原市教育委員会の今西隆行氏のご厚意により、実測図を確認させていただきました。記して感謝いたします。47はこれまで（間壁 1999）でのみ公表されていたが、南部町教育委員会人権・社会教育課文化財担当の佐藤伸之氏のご厚意により、当時の現地説明会資料を確認させていただきました。
- (5) 角度は実測図の注口部先端下側の延長線と屈曲部の稜線が交わる部分の角度を測定した。
- (6) 広島県立歴史民俗資料館の村田晋氏のご教示による。
- (7) ただ、唯一注口をもつ脚付壺が出土している浅井土居敷遺跡の現地説明会資料によると（会見町教育委員会 1981）、同遺跡では弥生時代中期後葉から後期にかけての円形周溝墓や方形周溝墓、テラス造成掘立柱建物などかなり特殊な遺構が検出されており、また注口をもつ脚付壺を含めた大量の丹塗り土器群や吉備に類例が多い脚付長頸壺、銅釧、ガラス製管玉などの特異な遺物が出土していることから、一般的な遺跡ではなかつたことは間違いないだろう。なお、現在これらの遺物は所在地不明となっている。

- (8) 東広島市出土文化財管理センターの妹尾周三氏のご教示による。また、広島県福山市池之坊1号墓(区画墓)では、後期初頭の類例器台が出土しており、主体部から鉄鏃が付着した鉄鎌が出土している(平林2004)。

挿図・付表出典

実測図は報告書から引用した場合でも、統一のために断面を黒塗りさせていただきました。

第1・2図 筆者作成。

第3図 1は(竹田・岡本1977)よりトレース後実見により筆者加筆、2は(岡本1998)よりトレース、3は(湯村2002)よりトレース後実見により筆者加筆、4は(阿部1984)よりトレース、5は(石井・岡田1996)よりトレース、6は(高畑1982)よりトレース後実見により筆者加筆。

第4図 7・8は筆者実測。広島大学大学院文学研究科考古学研究室蔵。9は(潮見1974)よりトレース後実見により筆者加筆、10は(道上1987)よりトレース後実見により筆者加筆、11は(下澤2004)よりトレース後筆者加筆、12・13は(弘田2005)よりトレース。

第5図 14は(村上1979)よりトレース後実見により筆者加筆、15~17は(湯村2002)よりトレース後筆者加筆、18は(久富ほか2011)よりトレース、19は(狭川2001)よりトレース、20は(小林・佐原1964)よりトレース、21は(久保脇1994)よりトレース、22・23は(清水2016)よりトレース。

第6図 24は(大橋1995)よりトレース後実見により筆者加筆、25は(亀山1996)よりトレース後実見より筆者加筆、26は(正岡ほか1994)よりトレース後筆者加筆、27は(高田2007)よりトレース、28は筆者実測。ノートルダム清心女子大学蔵。29は筆者実測。倉吉博物館蔵。30は(北浦2001)よりトレース後筆者加筆。31は(久保脇1994)よりトレース。

第7図 32は(妹尾1992a)よりトレース、33・34は(近藤・谷川2006)よりトレース、35は(曾根2013)よりトレース後実見により筆者加筆、36~38は筆者実測。36は岡山県古代吉備文化財センター蔵、37は広島大学大学院文学研究科考古学研究室蔵、38は井田直起氏蔵。39は(田中・石田2000)よりトレース、40は(仁木2005)よりトレース、41は(湯村・濱本2009)よりトレース。

第8図 42は(妹尾1987)よりトレース後実見により筆者加筆、43・44は実測図原図をトレース後実見により加筆。45は(岡田ほか1978)よりトレース後実見により筆者加筆、46は(田仲ほか1977)よりトレース後実見により筆者加筆、47は(間壁葎1999)よりトレース。

第9図 筆者作成。

第10図 48は(北・三木2005)よりトレース、49は(小原1983)よりトレース、50は(益田ほか1989)よりトレース、51は(森下1996)よりトレース、52は(西川2004)よりトレース、53・54は(戸羽2007)よりトレース。

第11図 55・56は(尾本原2000)よりトレース、57は(今福2016)よりトレース、58・59は(加藤1979)よりトレース、60・61は(岩田ほか2000)よりトレース後実見により筆者加筆、62は(小原2015)よりトレース、63は(岩田ほか2000)よりトレース、64は(妹尾1987)よりトレース、65・66は(野島ほか2009)よりトレース。

引用・参考文献

- 石田爲成 2008 「中国地方における弥生時代の地域間関係について ―塩町式土器を中心に―」考古学研究会岡山例会配布資料 考古学研究会岡山例会。
- 石田爲成 2013 「山陰地方における塩町甕の分布について」『立命館大学考古学論集』VI、立命館大学考古学論集刊行会、123~130頁。
- 一山 典編 1987 『阿波を掘る ―最近の発掘調査―』徳島市教育委員会。

- 伊藤 実 1992 「備後地域」『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編、木耳社、155～238頁。
- 伊藤 実 1997 「世羅西町黒川の銅鐸」『広島県立歴史民俗資料館研究紀要』第1集、広島県立歴史民俗資料館、43～58頁。
- 伊藤 実 2004a 「弥生時代」『三次市史』Ⅰ、三次市史編集委員会、63～205頁。
- 伊藤 実 2004b 「四拾貫小原遺跡」『三次市史』Ⅱ、三次市史編集委員会、44・45頁。
- 伊藤 実 2005 「四隅突出型墳丘墓と塩町式土器－四隅突出の思想とその背景－」『考古論集－川越哲志先生退官記念論文集－』川越哲志先生退官記念事業会編、375～398頁。
- 伊藤 実 2011 「弥生時代における備後地域の南北交流を探る」『芸備』第39集、芸備友の会、11～14頁。
- 今福拓哉 2012 「弥生墳丘墓の埋葬施設と墳丘構築に関する研究」『広島大学大学院文学研究科帝釈遺跡群発掘調査年報』XXVI、広島大学大学院文学研究科帝釈遺跡群発掘調査室・考古学研究室、83～100頁。
- 今福拓哉 2016 「四拾貫小原弥生墳墓の再評価と課題」2016年度広島史学研究会資料。
- 岡田善治 1992 「会見町・浅井土居敷遺跡の陶磁器」『松江考古』第8号、33～40頁。
- 河合 忍 2003 「弥生土器の空間的境界を考える」『越境する土器－土器による空間分析－』中部弥生時代研究会、17～28頁。
- 河合 忍 2004 「備前・備中地域」『弥生中期土器の併行関係発表要旨集』埋蔵文化財研究会、103～114頁。
- 河合 忍 2005 「弥生土器について」『久田堀ノ内遺跡』国土交通省苫田ダム工事事務所 岡山県教育委員会、543～550頁。
- 河合 忍 2015 「中国・四国」『考古調査ハンドブック』12、ニューサイエンス社、160～208頁。
- 久保穰二郎 2011 「鳥取県内の砂丘遺跡について」『青谷上寺地遺跡発掘調査研究年報』2010、鳥取県埋蔵文化財センター、25～49頁。
- 倉吉博物館 1978 『伯耆・因幡の文化遺産』倉吉博物館。
- 倉吉博物館 1984 『発掘された倉吉の歴史』倉吉博物館。
- 倉吉博物館 1995 『発掘で語る伯耆国』倉吉博物館。
- 佐伯純也 2016 「日南町出土土器の整理－三吉密ヶ谷（みよしみつがさこ）遺跡の弥生式土器群－」『米子市埋蔵文化財センターたより』第22号、米子市埋蔵文化財センター、3頁。
- 佐藤由紀男編 2015 『考古調査ハンドブック』12、ニューサイエンス社。
- 潮見 浩 1964 「山陽地方Ⅰ」『弥生式土器集成』本編Ⅰ、東京堂、44～46頁。
- 潮見 浩 1974 「シカの絵のある弥生式土器」『考古学雑誌』第60巻、第2号、73～81頁。
- 柴田昌兇 2011 「中・四国西部地域」『講座日本の考古学』5、青木書店、165～200頁。
- 清水真一 1992 「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編、木耳社、355～412頁。
- 菅原康夫・瀧山雄一 2000 「阿波地域」『弥生土器の様式と編年』四国編、木耳社、11～130頁。
- 角南聡一郎 2001 「小結 土器」『旧練兵場遺跡』善通寺市財団法人元興寺文化財研究所、69・70頁。
- 妹尾周三 1986 「江ノ川中・上流域における墓制からみた弥生時代中・後期の社会－佐田谷1号墓の調査とその意義を中心として－」『芸備』第17集、17～34頁。
- 妹尾周三 1992a 「注口付きの脚台付鉢形土器について」『古代吉備』第14集、95～115頁。
- 妹尾周三 1992b 「安芸地域」『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編、木耳社、239～318頁。
- 武末純一・石川日出志 2003 『考古資料大観』第1巻、小学館。
- 田中義昭・石田爲成 2000 「島根県横田町国竹遺跡出土の鉄斧について」『島根考古学会誌』第17集、131～143頁。
- 田畑直彦 2004 「周防・長門における弥生時代中期の土器と併行関係」『弥生中期土器の併行関係』埋蔵文化財研究会 第53回研究集会実行委員会、51～74頁。

- 田畑直彦 2014 「周防・長門における弥生時代前期から古墳時代前期前半の土器編年をめぐる研究史と今後の課題」『山口大学埋蔵文化財資料館年報』平成22年度、山口大学埋蔵文化財資料館、100～132頁。
- 野島 永 2015 「広島県北部における弥生墳丘墓の成立と展開 —佐田谷・佐田峠墳墓群の発掘調査を通して—」『広島大学大学院文学研究科考古学研究室紀要』第7号、広島大学大学院文学研究科考古学研究室、1～12頁。
- 濱田竜彦 2002 「洞ノ原墳墓群に関する一考察 —洞ノ原1号墓・洞ノ原2号墓出土土器の再検討を中心に—」『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報』2001、鳥取県教育委員会 鳥取県文化財保護協会、35～43頁。
- 平方幸雄・森下哲哉・真田広幸 1978 「天神川の流域」『さんいん古代史の周辺』〈上〉、山陰中央新報社、198～204頁。
- 藤田憲司 2010 『山陰弥生墳丘墓の研究』日本出版ネットワーク。
- 古屋紀之 2007 「山陰・三次地域の土器配置と葬送祭祀儀礼」『古墳の成立と葬送祭祀』雄山閣、82～93頁。
- 間壁菫子 1999 『古代出雲の医薬と鳥人』学生社。
- 正岡睦美・松本岩雄編 1992 『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編、木耳社。
- 松井 潔 1997 「東の土器、南の土器 —山陰東部における弥生時代中期後葉～古墳時代初頭の非在地系土器の動態—」『古代吉備』第19集、40～67頁。
- 松崎壽和 1955 「古代農村の復元 —広島県三次盆地を中心として—」『大学人会研究論集 廣島の農村』第2集、平和と学問を守る大学人の会、13～24頁。
- 松本岩雄 1992 「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編、木耳社、413～482頁。
- 松本岩雄 2011 「山陰地域」『講座日本の考古学』5、青木書店、237～266頁。
- 真鍋昌宏 2000 「讃岐地域」『弥生土器の様式と編年』四国編、木耳社、131～210頁。
- 村田 晋 2016 「弥生時代中国地方における脚付長頸壺形土器について」『広島大学大学院文学研究科考古学研究室紀要』第8号、広島大学大学院文学研究科考古学研究室、33～46頁。
- 森下哲哉 1996 「後中尾式土器」『日本土器事典』雄山閣出版株式会社、432頁。
- 湯村 功 2017a 「三吉密ヶ塚山遺跡」『新鳥取県史』鳥取県、812～815頁。
- 湯村 功 2017b 「浅井土居敷遺跡」『新鳥取県史』鳥取県、790～791頁。

報告書類

- 会見町教育委員会 1981 『浅井字土居敷遺跡発掘調査現地説明会』会見町教育委員会。
- 阿部 滋編 1984 『佐久良遺跡発掘調査報告』広島市教育委員会。
- 石井隆博・岡田容子 1996 『西東子遺跡発掘調査報告書』財団法人 東広島市教育文化財団。
- 今西隆行・辻村哲農 2017 『佐田谷・佐田峠墳墓群発掘調査報告書』調査編(2)、庄原市教育委員会。
- 岩田文章・岩田珠美・上野浩三 2000 『妻木晩田遺跡 洞ノ原地区・晩田山古墳群発掘調査報告書』本文編、淀江町教育委員会。
- 大橋雅也編 1995 『津寺遺跡』2、日本道路公団広島建設局岡山工事事務所 岡山県教育委員会。
- 岡田 博・秀島貞康・福田正継・中野雅美・竹田 勝 1978 「横田遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査』13、岡山県教育委員会、369～508頁。
- 岡本寛久編 1998 『大田茶屋遺跡2 大田障子遺跡 大田松山久保遺跡 大田大正開遺跡 大田西奥田遺跡』岡山県教育委員会。
- 小原貴樹編 1983 『米子市石州府遺跡群発掘調査報告書』I、米子市教育委員会。
- 小原貴樹編 2015 『尾高浅山遺跡 —弥生時代環壕遺跡と墳丘墓—』米子市埋蔵文化財センター。
- 尾本原勇人編 2000 『宗祐池西遺跡』三次市教育委員会。
- 加藤光臣 1979 「新迫南弥生時代墳墓関係遺構群」『中国縦貫自動車道に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(2)、

- 広島県教育委員会、257～281頁。
- 亀山行雄編 1996 『津寺遺跡』3、岡山県文化財保護協会。
- 北浦弘人編 2001 『青谷上寺地遺跡』4、財団法人鳥取県教育文化財団。
- 北 浩明・三木雅子編 2005 『名和飛田遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団 国土交通省倉吉河川国道事務所。
- 久保脇美朗編 1994 『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』6、徳島県教育委員会 財団法人徳島県埋蔵文化財センター 日本道路公団。
- 小林行雄・佐原 真 1964 『紫雲出』香川県三豊郡詫間町文化財保護委員会。
- 近藤 玲・谷川真基編 2006 『矢野遺跡』(Ⅲ)(弥生・古代篇)、徳島県教育委員会 財団法人 徳島県埋蔵文化財センター 国土交通省 四国地方整備局。
- 狭川真一 2001 『旧練兵場遺跡』善通寺市財団法人元興寺文化財研究所。
- 清水慎也編 2016 『垣外遺跡発掘調査報告』1、周南市教育委員会。
- 下澤公明編 2004 『八ヶ奥遺跡 八ヶ奥製鉄遺跡 岡遺跡 小坂古墳群 才地古墳群 才地遺跡』岡山県教育委員会。
- 妹尾周三編 1987 『佐田谷墳墓群』広島県埋蔵文化財調査センター。
- 曾根 猛編 2013 『国道313号道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(2)、財団法人広島県教育事業団。
- 高田恭一郎編 2007 『百間川兼基遺跡4 百間川沢田遺跡5』国土交通省岡山河川事務所 岡山県教育委員会。
- 高畑知功編 1982 『百間川兼基遺跡1 百間川今谷遺跡1』建設省岡山河川工事事務所 岡山県教育委員会。
- 竹田 勝・岡本寛久 1977 「山根屋遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査』12、岡山県教育委員会、13～150頁。
- 田仲満雄・正岡睦夫・二宮治夫 1977 「西江遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査』10、岡山県教育委員会、173～462頁。
- 戸羽康一 2007 『笠見第3遺跡』Ⅱ、鳥取県埋蔵文化財センター 国土交通省倉吉河川国道事務所。
- 内藤善史 1996 『絵図遺跡 南方遺跡』建設省岡山国道工事事務所 岡山県教育委員会。
- 仁木康治 2005 『曾根田遺跡 半太遺跡 稗田遺跡 久保田遺跡』久米町教育委員会。
- 西川雄大 2004 「SK65」『笠見第3遺跡』本文編、財団法人鳥取県教育文化財団 国土交通省倉吉河川国道事務所、233～236頁。
- 野島 永・石貫弘泰・小林昂博・辻村哲農・宮岡昌宣 2009 「佐田峠墳墓群(第2次)調査」『広島大学大学院文学研究科 帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』XXⅢ、広島大学大学院文学研究科帝釈峡遺跡群発掘調査室・考古学研究室、23～52頁。
- 野島 永編 2016 『佐田谷・佐田峠墳墓群発掘調査報告書』調査編(1)、広島大学大学院文学研究科考古学研究室・庄原市教育委員会。
- 柱本 舜・長谷部昇編 1990 『丸山大洞遺跡発掘調査報告書』鳥取県日野郡日南町教育委員会。
- 東 徹志 2000 「第7章 墳墓」『妻木晩田遺跡発掘調査報告』Ⅳ(洞ノ原・松尾城地区)、大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団 鳥取県大山町教育委員会、27～40頁。
- 久富正登・入江剛弘・東 貴之 2011 『上野遺跡Ⅰ 奈免羅・西の前遺跡Ⅲ』八頭町教育委員会 安西工業株式会社。
- 平林 工 2004 「池之坊墳墓群第1次調査」『神辺町内遺跡発掘調査概要』2002年度、神辺町教育委員会、11～18頁。
- 弘田和司編 2005 『久田堀ノ内遺跡』第1分冊、国土交通省苫田ダム工事事務所 岡山県教育委員会。
- 福田正継・高畑知功 1997 「野田畝遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査』11、岡山県教育委員会、61～408頁。
- 正岡睦美・柴田英樹・澤山孝之 1994 「黒住・雲山遺跡」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査』8、岡山県文化財保護協会、448～588頁。

- 益田 晃・中原 斉・瀧川友子編 1989 『長山馬籠遺跡』 溝口町教育委員会。
- 松村昌彦 1979 「戸宇大仙山遺跡群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(2)、広島県教育委員会、41～61頁。
- 道上康仁 1987 「殿山墳墓群の調査」『大判・上定・殿山 —三次市大田幸町所在遺跡群の発掘調査—』 広島県埋蔵文化財調査センター、54～66頁。
- 村上幸雄編 1979 『椽山遺跡群』 I、集落遺跡編、久米開発事業に伴う文化財調査委員会。
- 湯村 功 2002 『青谷上寺地』 3、財団法人鳥取県教育文化財団、国土交通省鳥取工事事務所。
- 湯村 功・濱本利幸編 2009 『梅田萱峯遺跡』 V、鳥取県埋蔵文化財センター 国土交通省 倉吉河川国道事務所。

Spouted Bowl-shaped Ceramic Vessels with Attached Pedestal Foot from the Yayoi Period in the Chūgoku and Shikoku Regions

Hiroataka MAKI

Examples of spouted bowl-shaped pottery with attached pedestal foot (*kyakudaitsuki hachigata doki*) comprise ceramic vessels with a high foot and spouted body. These large, highly decorated ceramic objects have been unearthed in the northern part of Bingo (eastern part of Hiroshima Pref.). They have been investigated alongside with the characteristic burials of this region, rectangular graves with burial mound and four corner projections (*yosumi tosshutsugata funkyū bo*). It is also the case that similar pottery is distributed over a wide area encompassing the Chūgoku and Shikoku regions. Comparative research concerning patterns, surface finishing, feature situations, and the means of the attachment of the spout suggests that these artefacts can be roughly divided into those from the northern part of Bingo and those from other areas. This result further demonstrates the uniqueness of the northern part of Bingo.

In the northern part of Bingo these large objects were continuously manufactured from the end of the Middle Yayoi period throughout the first third of the Late Yayoi period (1st century AD). This special pottery was used for funerary rituals. Particularly, it was commonly placed as offerings in the Sata-dani and Sata-dao groups of graves with burial mound in Shōbara city, Hiroshima Pref. Concerning forms and manners of offering, it is thought to have been strongly influenced by the southern part of Okayama Prefecture (Kibi). In addition to strong influences of the Kibi region, funerary rituals were performed using traditional ritual utensils.